



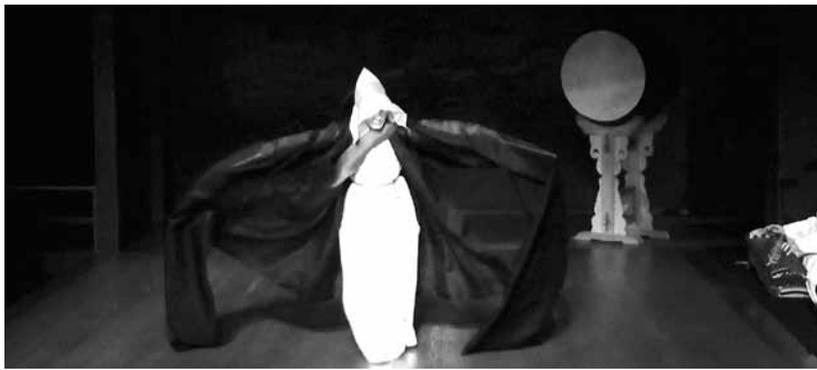
# 一生懸命休むこと からの解放

辛淑玉

「少しはゆつくり休んで」そんな言葉をよくかけられる。朝から晩まで駆けずりまわり、少しくらい休んだだけでは疲れがとれない。休まなきゃ、休まなきゃ、と、追い詰められたように休暇を取り、少しは寝なくちゃ、と必死にベッドに入る。そんなとき、自分は何をやってるんだらうかと思う。

被災地熊本では、ネットを通じて「朝鮮人が井戸に毒を投げ入れた」といったデマが飛んだ。被災地周辺は、私のような旧植民地出身者が定住している地域でもある。震災で家にも帰れず、その上、自分を「泥棒」や「犯罪者」扱いするデマが飛び交って、それこそ、身の危険を感じながら時を過ごしていることだろう。そんな一つひとつが、心にも身体にも堪えるのだ。

先日、私と同世代のヤン・リーピンの伝説の舞台「シャングリラ」



を観た。影絵のようにフォルムだけ映し出して踊る姿は、まさに「踊る精霊」と言われる通りだった。舞台では、少数民族の踊りを見事にショービジネスの世界に届けていた。衣装一つとってみても、その色彩の豊かさに驚き、そして、その歌声の響き、いや、ノドの響きとでも言おうか、大地が震えるような振動があった。

客席で周囲を見渡すと、かつて一緒に仕事をしたデザイナーやモデルたちが、いるわいるわ…。彼ら彼女らは、次の作品のためのネタ探しや情報蒐集、つまり商売のために来ているのが明らかだった。

た。40年ぶりの再会なのに、カネ、カネという臭いが飛んできて、また疲れた。

圧倒的な、絢爛豪華な舞台なのに、見ていてフツと醒めてしまう瞬間が何度もあった。それは、伝統として語り継がれ表現されてきたものが、男尊女卑の文化でもあったからだ。女は朝早くから夜遅くまで働き、メシも作り、子育てもし、男が病気になるたら介護もする、だからすばらしい、といった女性賛歌の歌詞や、異性愛を前提とした色っぽい物語が続く。ショービジネスの世界では、性的な表現は欠かせない。

ヤン・リーピンの高い評価は、「性的魅力」に基づくものと言ってもいいだろう。そして、それを見る人たちは、みな男の目線で見ているように感じた。男は、女を品定めするような目で見る。女は、男の目線で彼女を見て、あのようになりたいと思う。化粧品会社のCMのようにだ。

でも、半世紀以上生きてきて、まだ男の目を気にしなくちゃいけないのかと思うと、どっと疲れる。そのせいか、劇場を出たあと、映画『ビルマの堅琴』を思い出してしまった。

この映画は日本では大ヒットしたが、ミャンマーで友人の学者が地元の人たちに見てもらったら、誰も興味を示さなかったという。『ビルマでは僧侶が堅琴を持つこととはない』「映画で着ている僧侶の服はタイのもので、ビルマであ

んなものは着ない」と散々だった。要するに、のめり込めないきつかけがあるのだ。

数日後、南青山の能楽堂で、チョウ・スオクの「コムヒャン（墨の香）」を見た。チョウは、対馬で生まれた在日で、韓国で修行を積んできた、抜きん出た舞踊家である。

私は、在日のなんとか歌舞団、歌劇団というのは、全く肌に合わない。口角を上げて笑う表情が、なんとも言えずゾツとするのだ。

その上、韓国語が少しばかりでさがるせいで、80年代90年代は、韓国の国楽や伝統芸能の司会を何度もやらされた。そこでは日本社会で受け入れられるものが紹介されていて、扇の舞とか、酒席で男たちが喜ぶものがメインだった。ヘグムやパンソリなど、ほとんど無かったように思う。

舞台に出てきたチョウ・スオクは、まず、歩いている感じがしない。水の上をスーッと流れるように、小さな能舞台に現れた。

その瞬間、この世からスッとあの世に連れて行かれたような気がした。「僧の舞」は、何度も見たことがあるが、男の踊り手ばかりだった。しかし、彼女の舞は見事だった。気品があるのに「エロ気」は全くない。解説も一度も入らない。司会もない。日本語しか分からない観客にこれでもいいのかと思うほどだった。

ただその空間に身を委ねるだけ。そして、表現は言語を越えていった。

チャンゴ（長鼓）が喋り、空気が動き、テグムやヘグム、カヤグム（琴）、ピリ（笛）たちが会話を始めているのだ。

見せようとして見せているのではない。自分たちで楽しんでいるのだ。

韓国での宴会は、日本と違って、一次会、二次会、…果ては五次会と、どんどんいろんな人が増えていつて大騒ぎになる。日本のように、三次会で数人に減るような遊び方はしない。これと一緒に、この舞台は周囲を巻き込んでいくのだ。しかも、悲しかったり、嬉しかったり、歌で慰めてもらったりと、人間の哀しみも苦しみもそこにあつた。

長崎くんちの贅沢さを超える、宮廷の贅沢さとも言えはばいだろうか。

人生の中で聞いたことのないチャンゴの音色に、胸をわしづかみにされ、チョウ・スオクの、生きていく人とは思えない最後の挨拶（両手を横にして跪く朝鮮式挨拶）の姿は、朝鮮半島の礼を尽くした形というのはこういうものかと思つたほどだ。

会場を後にして、「そうか、見てくれ！という舞台ではなく、舞台の中に、故人も含め、全ての人と魂を招き入れたのだな」と思つた。

外にいるのではなく、内に入つたとき、人間は休まるのだなあ、と。（シン・スゴ…人材育成コンサルタント）

# アジエン奏者 尹暑京

墨香（コムンヒャン）終了後にアジエン奏者の尹暑京（ユン・ソギョン）先生にインタビューしました。他の演奏家の先生方にもインタビューをしましたが、それは次回掲載します。

— 国楽の道に入られた切っ掛けは何ですか？

尹：父がアジエン奏者だった（\*1）ので、物心ついた頃から、父がアジエンを演奏する姿に接していました。7歳の時から簡単な手ほどきを受けるようになりました。中学に入った13歳の時から本格的な修練が始まりました。中学と高校は普通の学校に進みました。高校三年の時には、芸術を教える学校に編入しました。大学はチュゲ芸術大学に進み、そこでもアジエンを習いました。

親が子に教えるのはなかなか教えにくいといいますが、父は教えにくかったようです。他のお弟子さんたちと一緒に習いましたが、他のお弟子さんより甘いと言うことはありませんでした。同じように教えられました。

\*1：父は尹允錫（ユン・ユンソク）先生。1939年全羅北道ヨサン出身。11歳の時に国楽の道に入って伽倻琴を習い始め、19歳の時に故ハン・イルソプ先生からアジエンを習うようになった。1984

年の全州大私習大会で壮元（首席）を受賞。1990新羅文化祭で大賞受賞。現代の名人の一人である。

— 本格的な活動を始めたのはいつ頃からですか？

尹：2000年に軍隊を除隊してからです。2003年には国楽院に入団できましたので、その時から本格的な演奏活動をしています。

— 既に何度も日本での公演を経験されていると思いますが、日本と韓国で違いを感じることはありますか？

尹：スタッフの質の高さを感じます。日本のスタッフは、こちらを先ず第一に気遣ってくれます。職人魂というのでしょうか音響にしても、マイクのセッティングを納得がいくまでして、最高の音を観客に届けようとしています。

— 観客はどうですか？ 違いを感じることはありますか？

尹：日本の観客は静かですね。フランスをたくともありませんし、大人しいです。韓国だと、フランスはバンバンたかれますし、騒がしいです。それと日本の観客は熱心ですね。じつとこちらを見



つめます。見つめる圧力というのが、もの凄いです。但しそれは嫌なものではありません。それだけ強く期待されているわけですから、こちらこそ思いに応えようという気になります。聞いた話ですが、日本の人は家に帰っても、頭の中で何度も舞台の光景を再現して、あそこがどうだったか、ここはどうだったかと分析したりする人も居るそうです。韓国では余りそういうことは聞きません。韓国人の場合は、先ず自分が楽しむことが先です。ですから声を出し、興に乗って、大騒ぎをしますが、家に帰ると、はて、俺は今日は何を見

てきたんだっけ、という人も居るぐらいで（笑）。

— 伝統音楽を続けるには、現代は困難な時代だと思えますが、この点に関してはいかがですか？

尹：いい演奏をしていれば、理解されると思っています。

— 西洋の音楽に慣れている人には、なかなか難しいんじゃないでしょうか？

尹：中には凄い人が居て、いい悪

いを完璧に聞き分ける人が居ます。それは凄いですね。だけど少数派ですよ。

尹：ええ。少ないです。ですから機会がある度に、異なるジャンルの音楽家達とコラボやセッションをするようにしています。MIDI（\*2）で音楽を作って、他の音楽家達に提供したりもしています。

\*2：MIDI（ミディ）… コンピューターで音楽を作り、どの音楽ソフトでも使える形式のファイルにすること。取り込むと誰でもその楽曲を利用できるようにする。

— 日本の宮中音楽の、しちりき奏者が草原で演奏をしていると、地平線のかなたから牛や羊がやって来て、演奏家の前でじつと耳を傾けてその演奏を聴き、演奏が終わると再び地平線に向かって去って行ったということですか？

尹：おお、不思議な話ですね。

— 伝統楽器の音は、牛や羊も聞きながらのことだと思えます。それだけ心をいやしてくれる音だと思えます。韓国は今や Heer Korea といわれるぐらいのストレス社会なので、伝統楽器を使っただけのヒーリング音楽は、潜在的な需要が有るのでは無いでしょうか？

尹：なるほど。そうかも知れません。

— 今回の公演は能舞台で行われた

のですが、能舞台については何か感想がありますか？

尹：能舞台は3〜4回経験しています。前は確か大阪で経験しました。ここ（鎮仙（てっせん）会）もそうですが、音の響きがいいですね。舞台の床の下にかめを幾つも入れて音を響かせているという話を聞いたことがあります。マイクを使わなくても全体に音が響きます。そのせいか、自分の周りの演奏家の息づかいや、感じていることなどが、こちらにも良く伝わります。それでお互いが反応して、いい演奏ができるのだろうと思います。こういう空間があるというのは、羨ましいですね。

— 今回の公演についての感想をお聴かせ下さい。

尹：趙寿玉先生の伴奏は4回目ぐらいだったと思います。印象的なのは、きちんとしているということ。趙寿玉先生自身がそうだから、周りもそうなるのだろうと思います。物事の進め方や、手順が、きちんとしていて漏れがないし、それはスタッフの方達の努力のお陰でもあるのですが、お陰でこちらも気持ちよく、演奏ができました。

— どうも有り難う御座いました。（聞き手：編集委員 李起昇（いきすん））

# ファイティン!

滝本和沙

今から7年前の春、韓国語の勉強を始めました。きっかけはテレビで観たハンゲル文字。何て読むのか知りたくて語学教室に通い始めました。ある日ドラマ「トンイ」のワンシーンに目が留まりました。宮廷のお祝いの席で女性達が踊っていた太平舞。華やかな場面に魅了されてしまった私は「私もきれいな韓服を着て踊ってみたい」その先にある苦労など知らずに韓服を着たい欲だけで韓国舞踊を習い始める事を決めました。

実は私、川崎カルチャーで習う以前に他の韓国舞踊教室で短期間習っていました。その時は、手の基本と足の基本のみの練習でしたが、以前も今でも言われる事、肩の力を落とす、関節をやわらかく。頭の中で理解しても、なかなか思うように出来ず力が入ってしまふ。丹田を意識を！お尻の穴を締める事！慣れてしまえば無意識に出来る事が私一人だけ出来なくてとり残された様でくやししいし、焦るし、みじめな気持ちにもなりました。「こんなに韓国舞踊って苦勞しないといけないの？」私の様に韓服を着て踊りたい単純な欲だけで始めると実際とのギャップにストレスを感じました。クラスの仲間にも少し追いつける様に自宅でも練習しました。

姿見を見ながらコツコツと。そのおかげなのか、時々林鮮玉先生から「コツ練(こつそり練習の略)したの？」と言われたりしました。

一昨年のチュムパンおさらい会に初めて参加しました。トンチョスゴンチュムを踊りましたが、とても緊張して頭の中が真っ白になり、今思い返すとどうやって踊ったのかも覚えていないし、教えて下さった金政先生に申し訳ない気がしました。

それから一年後のおさらい会。今回は川崎カルチャーのメンバー3人で同じトンチョスゴンチュムを踊りました。今回は頭の中が真っ白くならなかったし、何よりきちんと目を上に向けた事も出来ました。まだまだ実力もないし、上級者の方々の足元にも及びませんが、今自分が持っている力を最大限に出す事。そして最後まで諦めないで踊る事。今回のおさらい会ではプチェチュムも披露出来ました。カルチャーのメンバー4人にいただいた大きな拍手は一年間の努力の成果だと感じました。おさらい会終了後、力が一気に抜けたようでした。打ち上げにも誘っていたら、その帰り際、趙寿玉先生から「韓国舞踊は好き？」「ファイティン! (頑張つて)」と声をかけていただき、これまでのストレスが解かれ、涙があふれました。



私は韓国舞踊が好きです。練習を積み重ね昨年より今年、今年より来年と自分自身が変化し成長して、チュムパンのおさらい会で堂々と踊りたいです。(たぎもと・かずさ・川崎カルチャークラス)

## 一期会のお花見

### 「なごみ邸」の観桜会

宮崎節子

「なごみ邸」は横浜緑区の閑静な住宅地の高台に、昭和初期の純和風の民家と日本庭園を有した、たぐいまれです。春と秋の年2回、庭内では野外ステージを設えて多種の催しが毎年行われているそうです。4月2日私たちが訪れた日は、早朝からの雨は上がったものの、肌寒い曇り空でした。でもこの日関東周辺の桜はまさに満開で、なごみ邸への坂を上がつて行くと、邸内を取り巻く樹齢百年の

巨木桜が見えて来て、満開の桜の景色に思わず見とれてしまいました。邸内の花見は「観桜会」と称して桜を愛でながら、桜に包まれて野外舞台を楽しむ趣向で——今回は韓国伝統舞踊、講談、能舞の演目ということでした。それに抹茶と菓子付きで観桜料五百円。舌も目も満足させてもらい午後二時いよいよ始まりです。

「サルプリ」舞が始まり趙寿玉先生が能舞台の橋がかりの様な細い道をゆつくりと進み、舞台中央へ。音楽が始まり、踊りの動作が、じつくりと音楽にのせてボソンの先が見え始める。風が結構出て来て白いスゴンとチマの裾が踊りに余韻を残すかのようになびき、ゆれ動く。先生は風の流れをとらえてスゴンの落とす方向を見抜き風に乘せて行く。見ようによつては風と戯れているようにも見えるが音楽の流れと踊りの振りとの風の強弱の流れの一瞬一瞬の収まり所を掴み、野外ならではのスリルと瞬間の面白さを満喫。先生の表情は面をつけてない能面の如くで、空に薄日が射し込むと白いチマチヨゴリが淡いピンクに写し出され、これも自然からのプレゼントと思えました。至福の20分でした。

次は昔話の羽衣伝説を元にした能です。羽衣がないと天に帰れないからと漁師から羽衣を返してもらい、天女は約束どおり羽衣を着て春の美保の松原をたたえ、富士山の方に舞い上がり霞みの中に消えて行くと言う筋書き。まさに満



開の桜の花のなかに薄い緋色の羽衣が流れるように、能のある独特の足さばきが天女のはかなさをもし、散る桜の花びらを連想させ桜・木々・空の景色との凄く一体感が感じられお能の伝統の奥深さを感じました。野外の能は初めてでしたが幽玄のうつろうたたまえを実感した、しあわせな一日でした。帰り道小学4年生の男の子の作った「さくら」の詩を思い出しました。

「4月のはじめに咲きそめた  
きれいな桜よ よい香り  
さくらは みんなを乐ませ  
微かな風に散つてゆく」  
さくらに感謝です。

(みやざき・せつこ)

剣舞ワークショップに参加して

楽しくて苦しい韓国舞踊

金 香清

「ヒョンチョン、踊りは楽しい？」  
ある日、練習が終わり一息ついて  
いるところに趙寿玉先生がこう尋  
ねてきた。私は少し考えて小さい  
声でこう答えた。  
「楽苦しいです(たのびるしいです)  
……」

「腕が斜めになつて見えるように見え  
ますが、実際には横に伸ばします。  
そのまま上体を傾けることによつ  
て自然と斜めに見えるのです」「身  
体は上下前後左右、すべて違った  
動きをしていながらも、それを融  
合させる必要があります。陰と陽、  
反発と融合の連続です」……。

と言つても韓国舞踊のレッスンは  
であることは紛れもない事実。こ  
んなことを表現しながら踊ること  
が果たして自分には可能なだろう  
か、と何度も思つては落ち込んだ。  
普段でもレッスンを受けている  
と、「数ある踊りの中で、何故より  
よつて韓国舞踊を選んではしまつ  
たのだろうか」と思  
うことがある。韓国  
舞踊は右左、前後の  
順番を覚えただけで  
は踊れるものではな  
く、また運動神経が  
よいからと言つてで  
きるものでなく、リ  
ズムに乗ればよいと  
いうものでもなく、  
とにかく「ややこし  
くて」「複雑な」踊  
りだ。ましてや運動  
会の100mメート  
ル走で万年ビリケツ  
だった私は、正直「右  
行つて、左行つて」  
を覚えるだけで精一  
杯だ。

界を表出させたもの」だといった  
内容が書かれていた。チマを手に  
持った際にできる皺は「水の波紋」、  
腕の動きは「しだれ柳」……。  
確かに普段のレッスンでもそう  
指導を受けている。例えば腕を動  
かす際もパキッと90度の角度で動  
かすことは少ない。布が風になび  
く際、角度をつけるでもなく、一  
定の波でもなく、小さい波から大  
きな波を作つていくように腕や身  
体を動かす。  
しかし、私の場合はその「自然」  
な形を作れずに、かくかくとした  
ロボットのような「不自然」な動  
きがむしろ「自然」に出てきてし  
まう。

鏡の中で踊る自分の姿がぎく  
しゃくしていておかしいのだけ  
ども、どうにもできない。そして、  
何度か踊るうちにわかつたつもり  
になつても、またわからなくなる。  
そんなことの繰り返しで、とても  
「楽しいです!」とは即答できな  
かつた。

そんな楽苦しい舞踊のレッスンを  
を出産、育児のために4〜5年ほ  
ど休んでいたが、昨年末から再開  
することになった。相変わらず身  
体は言うことを聞かず、練習中  
にふと周りを見ると自分だけおか  
しな方向を向いている。そんな風  
にブランクを埋めるのもままなら  
ない状態だったが、新しく晋州剣舞  
を習うことになり、韓国からいら  
した金美善(キム・ミソン)先生  
のワークショップにも参加するこ  
とになった。

小道具の小剣を落とさないよう  
に持つているだけで精一杯な中  
で参加したワークショップは、ま  
るで物理学や哲学の講義を聞いて  
いるような気分だった。



先日、韓国舞の名  
人として有名な金壽  
岳(キム・スアク)  
先生の文献を読む機  
会があった。そこに  
は韓国舞踊は「自然

苦しい、とにかく苦しい。苦し  
さを説明しろと言われたらいくら  
でもできるが、「楽しさ」について  
はどう表現すればいいのかわから  
ない。かろうじて例えるなら、真つ  
暗なトンネルの中で、遠くに小さ  
な光がちらつと見えたときのご  
う、そういう気持ちになることが  
ごくごくたまにある。  
「楽しい」を増やすための近道はな  
く、「苦しい」を積み重ねながら精  
進していくしかない。また「苦しみ」  
が多いほど、尊い「楽しさ」にな  
るのだろう。それを忘れずに今後  
も練習に励んで行きたいと思う。  
(キム・ヒョンチョン…初級クラス)

活動報告

- ◎2016年2月5日(金)〜7日(日)  
**舞踊ワークショップ** 講師:金美善先生  
作品:ミンサルブリ 口音剣舞 東京・新宿区 榎、若松、筆筒地域センター
- ◎2016年3月12日(土)17時開演  
**アジア芸術協会韓国伝統名舞展**  
出演:金玉星、趙寿玉ほか 在日本韓国YMCAスペースY(地下1階)
- ◎2016年4月2日(土)  
**なごみ邸 観桜会** 特設舞台での舞踊公演に出演

◎2016年4月15日(金)及び16日(土)  
**趙寿玉 舞踊公演 墨香(コムンヒョン)** 東京・南青山 鏡仙会能楽堂

活動予定

- ◎2016年5月21日(土)  
**大久保地域センター主催 五月(さつきまつり)**  
初級クラスが出演。10時〜15時30分 入場無料
- ◎2016年5月15日(日)及び6月12日(日)  
**ブクチュム、ワークショップ**  
講師 金玉星先生 主催:趙寿玉チュムパンの会 (受講は会員限定になります)

